

砂田姥沼遺跡 B区

平成19年12月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮市の南東部に位置する東谷・中島地区は、近年までのどかな田園風景が広がっていましたが、大規模な区画整理事業等に伴い、著しい変貌を見せております。また、開発に伴い発掘調査が数多く実施され、重要な遺跡が多数存在することが明らかになってきた地域でもあります。

そのなかで、このたび同区画整理事業地内の砂田姥沼遺跡において、株式会社浜村鉄工所による工場建設事業が計画されました。

事業主体者である同社と、土地分譲者である独立行政法人都市再生機構、及び本市教育委員会では、文化財保護の観点から誠意をもって協議を重ねましたが、遺跡を現状で保存することは不可能であるとの結論に達しました。

そのため、本市教育委員会が調査主体となり、都市再生機構が費用を負担し、現地における調査と調査報告書の作成については株式会社東京航業研究所が担当して、工場建設により影響を受ける部分について、記録保存のための発掘調査を実施いたしました。

その成果をまとめたものが本報告書であります。多くの方々がさまざまな面で活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財に関する協議や発掘調査にあたり多大なご理解ご協力をいただきました関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成 19 年 12 月

宇都宮市教育委員会

教育長 伊藤 文雄

目次

序 目次 例言 凡例	
第1章 調査に至る経緯と調査経過	
1-1 調査に至る経緯	1
1-2 発掘作業の経過	1
1-3 整理作業の経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
2-1 地理的環境	2
2-2 歴史的環境	3
第3章 調査方法と成果	7
3-1 調査の方法	7
3-2 基本土層	7
3-3 遺構	9
3-4 遺物	17
第4章 総括	19
参考文献	
写真図版	
報告書抄録	

挿図・表目次

第1図 砂田絶沼遺跡の位置	2
第2図 砂田絶沼遺跡周辺の地形	3
第3図 砂田絶沼遺跡と周辺の遺跡	4
第4図 基本土層	7
第5図 調査区全体図	8
第6図 1号住居図	10
第7図 1号住居カマド	11
第8図 1～3号溝平面図	13
第9図 1～3号溝断面図	14
第10図 1・2号土坑	16
第11図 出土遺物	18
第1表 砂田絶沼遺跡と周辺遺跡一覧	5
第2表 出土遺物属性一覧	17

図版目次

図版1 調査区全景
図版2 調査区全景
図版3 1号住居全景、1号住居カマド
図版4 1号住居掘り方、作業風景
図版5 1～3号溝全景、1号溝全景
図版6 2号溝全景、2号溝土層断面
図版7 3号溝全景、2・3号溝土層断面
図版8 1号土坑全景、2号土坑全景
図版9 16・24・31・35・43・53・61・64号ピット
図版10 出土遺物

例 言

1. 本書は、宇都宮市に所在する砂田焼沼遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、株式会社浜村鉄工所による工事の建設に伴い同鉄工所の調査依頼に基き、宇都宮教育委員会が調査主体となり、土地造成・分譲を行った独立行政法人都市再生機構が費用を負担し、委託を受けた株式会社東京航業研究所が実施した。
3. 調査については、以下の体制で行った。

所在地 宇都宮市砂田町宇姥沼 東谷中島地区51 街区3画地

調査面積 138.59 ㎡

調査期間 平成19年7月17日～平成19年7月26日

調査指導 西脇俊郎（東京航業研究所）

調査担当 小野麻人（東京航業研究所）、大橋 生（東京航業研究所）

調査及び整理参加者 荒川康佑 安藤テツ 飯野勝平 飯野正子 市瀬俊一 加藤 玄 軽部 孝

川下由光 川村宣央 佐々木新治郎 佐藤和彦 篠原安子 清水征島

近清路子 土屋隆行 長江求吉 林 邦雄 古川貴弘 峯岸未以留 村山彩子

渡辺真吾 渡辺弘美

事務担当 神野安伸（宇都宮市教育委員会）

4. 本書の執筆・編集は、小野が実施した。各項の文責は各文末に記載している。
5. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表す次第である（敬称略・順不同）。

今井千恵 上野 茂 関根唯充 長井光彦 村山 修

社団法人 宇都宮市シルバー人材センター

凡 例

1. 本文中に掲載した実測図の縮尺は、原則として次の通りである。
全体図1：100 堅穴住居1：30 カマド1：20 溝1：40、1：50 土坑1：20
土器実測図1：2 石器実測図1：2
2. 遺構実測図中のレベルは海拔高、方位は座標高を示す。
3. 遺構実測図中のスクリーントーンはカマドを示す。
4. 写真図版は原則として1：2とした。
5. 遺物番号は本文、挿図、写真図版と一致する。

第1章 調査に至る経緯と調査経過

1-1 調査に至る経緯

今回の調査地区については、平成19年5月9日付けにて、株式会社浜村鉄工所より宇都宮市教育委員会あてに文化財保護法第93条による土木工事等の届出の進達依頼があった。

内容について宇都宮市教育委員会にて検討したところ、届出に係る場所は、周知の埋蔵文化財包蔵地「砂田姥沼遺跡（栃木県遺跡番号4356）」の範囲内であり、発掘調査が実施されていない場所であることがわかった。また、過去に実施された周辺の発掘調査結果を勘案すると、工場建設予定地内に遺構が存在する可能性はきわめて高いものと考えられた。

その結果に基づき、意見を付して栃木県教育委員会にて進達したところ、発掘調査を実施すべきとの指示が同県教委より事業者あてに発せられた。

当該地は独立行政法人都市再生機構が造成し売却した場所であるため、同機構・事業者・宇都宮市教育委員会の三者で協議を実施した結果、同地については県教委からの指示に基づき発掘調査を実施することで合意した。

調査の実務について検討を行った結果、事業者「株式会社浜村鉄工所」の調査依頼のもと、土地造成・分譲を行った独立行政法人都市再生機構が費用を負担し、宇都宮市教育委員会が調査主体として手続き等の事務処理を行い、株式会社東京航業研究所が現地における発掘調査及び発掘調査報告書の作成を担当することとなった。

(神野)

1-2 発掘作業の経過

発掘調査は、平成19年7月17日から平成19年7月26日までの2週間にわたって実施した。先ず17日から重機により表土掘削を開始し、地表より1m程で遺構を検出した。18日までに、竪穴住居跡1軒、溝3条、土坑2基、ピット65個を確認した。これらの遺構の調査を適宜実施し、7月26日までは調査を終了した。出土遺物は少なく、いずれも小片であったため、収納箱1箱にとどまった。

1-3 整理作業の経過

整理作業は平成19年8月1日より11月30日まで断続的に行った。8月には、遺物の洗浄・注記・接合・復元作業を実施し、併行して、今回の調査では、セクションを除く遺構実測を主に写真測量にて行ったため、STP（デジタル図化解析機）による図化作業、写真整理作業を行った。

9月からは遺構図面の編集、遺物実測・トレース作業、写真撮影、図版作成、原稿執筆作業を行い、10月末までには報告書編集作業を行った。

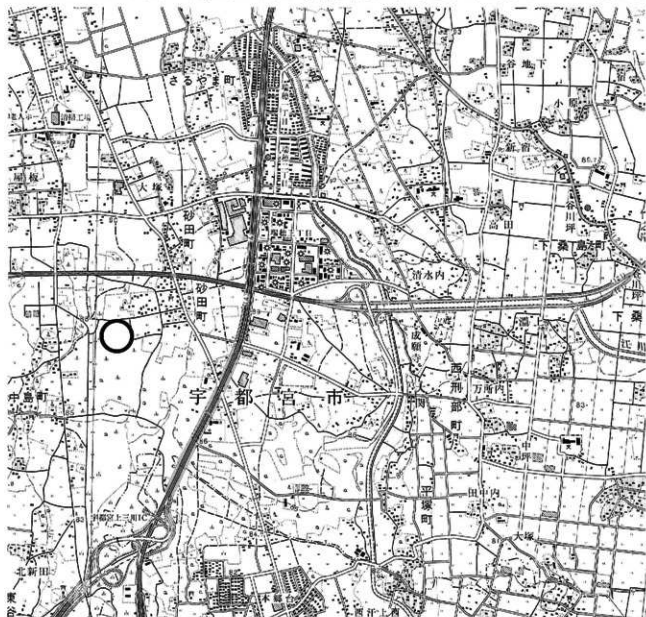
(大橋)

第2章 遺跡の位置と環境

2-1 地理的環境

旧都市基盤整備公団（現独立行政法人都市再生機構）による「東谷・中島土地区画整理事業」として、宇都宮市中心部より南南東へ7km、東は新国道4号、北は宇都宮環状線、南は県道雀宮・真岡線に挟まれた140haの地域において工業団地や流通業務施設の造成が進められており、大型商業施設や住宅地も進出するなど、市街化が進行している。また、地区内に北関東横断自動車道路の宇都宮・上三川インターチェンジも位置し、交通の要衝として、その重要度を高めつつある。

砂田姥沼遺跡は、東谷・中島地区の北東、宇都宮市砂田町に位置する。東側4.2kmには鬼怒川、



第1図 砂田姥沼遺跡の位置 (1:25,000)



第2図 砂田姥沼遺跡周辺の地形

(栃木県埋蔵文化財調査報告書第127集「辻の内遺跡・柿の内遺跡」より縮図・一部改変)

西側1.8kmには田川がそれぞれ南流している。

栃木県の地形は、東部の八溝山地、北～西部の下野・足尾山地と、これらに挟まれた中央平地から構成されている。この中央部の平地は、南流する鬼怒川や田川などの河川により侵食され、宝積寺台地、岡本台地、田原台地、宝木台地など、南北に細長い台地と低地を数条にわたって形成している。

本遺跡が位置する田原・願成寺台地は、鬼怒川低地と田川低地に挟まれた全長33km、幅2.0～2.5km、標高68～170mの台地である。樹枝状に侵食している低地との比高差は本遺跡付近では1～2mと低台地状を呈しており、東側において、無名瀬川を挟んで岡本台地と接している。かつて本遺跡の付近には姥沼と呼ばれる沼沢地が存在していたといわれるが、現存しない。

(小野)

2-2 歴史的環境

本遺跡が位置する田原・願成寺台地は、宇都宮市内でも有数の遺跡密集地帯として知られている。特に濃密な分布をみせているのが古墳時代を中心とする集落や古墳群であり、本遺跡でも当該期の集落の一部が確認されている。

旧石器時代

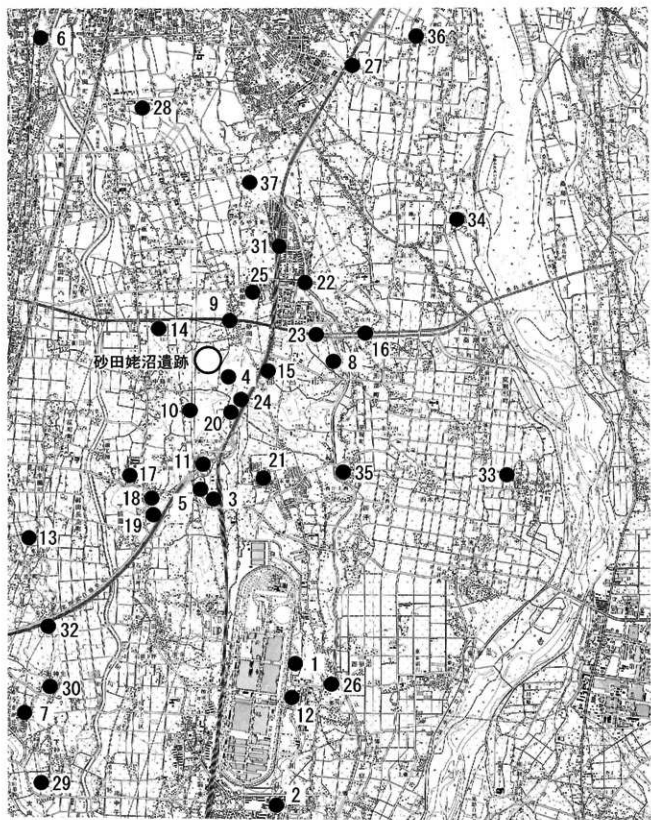
旧石器時代に属する遺跡の分布は希薄であり、磯岡遺跡(3)や西刑部西原遺跡(15)、西赤堀遺跡(21)などで旧石器時代後半期の石器ブロックや尖頭器などが確認されているだけである。

縄文時代

縄文時代の遺跡としては、仏沼遺跡(1)、大可遺跡、坂上北原遺跡などで草創期の土器が出土している。中期では、島田遺跡(2)において22軒の堅穴住居と袋状土坑多数が発見されている。東谷・中島地区では、磯岡遺跡(3)で阿玉台式期、中島笹塚遺跡(4)で加曾利E I式期の堅穴住居が1軒ずつ確認されている。この他、田川西岸の二軒屋遺跡や石川坪遺跡などでも当該期の住居や袋状土坑が確認されている。後期は遺跡が少なく、遺物のみの確認例が多い。晩期では前出の石川坪遺跡が代表的であり、権現山遺跡(5)でも大洞C 2式期の住居が確認されている。

弥生時代

栃木県域では、当該期の遺構・遺物は全体に希薄である。本遺跡の周辺でも中期例としては土器の出土のみが確認されている。後期になると田川西岸を中心にやや増加をみる。東河田遺跡として戦前から知られる本村遺跡(6)、21軒の堅穴住居が確認された殿山遺跡(7)などが比較的大規模である。この他、後期二軒屋式土器の標式遺跡である二軒屋遺跡や上ノ原遺跡などが代表的なもの



第3図 砂田姥沼遺跡と周辺の遺跡 (1:50,000)

第1表 砂田鈍沼遺跡と周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種類	時代	No.	遺跡名	種類	時代
1	仏沼遺跡	散布地	縄文	20	磯岡北遺跡	集落跡・古墳・推定東山道	縄文～中世
2	烏田遺跡	集落跡	縄文	21	西赤堀遺跡	集落跡・古墳	古墳・奈良・平安
3	磯岡遺跡	集落跡	縄文～古墳・平安	22	瑞穂野原地遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
4	中島笹塚遺跡	集落跡・古墳	縄文・古墳・奈良	23	大岡台遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
5	権現山遺跡	集落跡・首長居宅・推定東山道	縄文・古墳・奈良・平安	24	琴平塚1号墳	古墳	古墳
6	本村遺跡	集落跡	弥生	25	下釜島西原古墳群	古墳	古墳
7	殿山遺跡	古墳	弥生	26	上郷籠塚古墳	古墳	古墳
8	西刑部古屋原遺跡	古墳	古墳	27	久部愛宕塚古墳	古墳	古墳
9	砂田東遺跡	集落跡	古墳	28	下梨大塚古墳	古墳	古墳
10	立野遺跡	集落跡・溝	縄文～奈良・中世・近世	29	澤市遺跡	集落跡	古墳
11	杉村遺跡	集落跡・推定東山道	縄文～古墳・奈良・平安	30	後志部古墳	古墳	古墳
12	上郷26・27号墳	古墳	古墳	31	猿山遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安
13	権現山古墳群	古墳	古墳	32	上神主・茂原遺跡	政庁跡・正倉跡	奈良・平安
14	砂田遺跡	集落跡・土坑墓	縄文・古墳～平安・近世	33	刑部城	城館跡	中世
15	西刑部西原遺跡	集落跡・推定東山道	古墳	34	桑島城	城館跡	中世
16	成願寺遺跡	集落跡・古墳	古墳	35	高島館	城館跡	中世
17	双子塚古墳	古墳	古墳	36	石井城	城館跡	中世
18	笹塚古墳	古墳	古墳	37	さるやま館	城館跡	中世
19	鶴舞塚古墳	古墳	古墳				

して知られる。また、本遺跡の南部においても少量の後期土器片が出土している。

古墳時代

前期の集落は、田川東岸では西刑部古屋原遺跡(8)、砂田東遺跡(9)、本遺跡の2区、3区など、小規模なものが点在している。前期末～中期初頭にかけては、立野遺跡(10)、杉村遺跡(11)でそれぞれ堅穴住居が確認されている。前期古墳に関しては、小規模で数も少ないが、西刑部古屋原2・

4号墳(8)、上郷26・27号墳(12)などがある。田川西岸には、権現山古墳(全長63m)(13)を中心とする前方後方墳3基を中心とする茂原古墳群があり、大日塚古墳墳丘下や愛宕塚東など、周辺に前期前半の集落が見られる。

中期になると、東谷・中島地区でも本格的な集落が形成される。中核となるのは、権現山遺跡(5)であり、首長の居宅と推定される区域を中心に、高密度の住居跡分布を見る。周辺には、同時期か若干遅れて砂田(14)、立野(10)、西刑部西原(15)、杉村(11)、磯岡(3)、砂田東(9)、成願寺遺跡(16)など多くの集落が形成される。これに対応するように、地区の西側に双子塚(全長73m)(17)、笹塚(全長100m)(18)の2基の前方後円墳を中心に、鶴舞塚(全長53m)(19)などの大型円墳を含む東谷古墳群が形成される。この周辺部には、磯岡北(20)、中島笹塚(4)、西刑部西原(8)などの中期群集墳が形成される。田川西岸においては、笹塚古墳にやや遅れて塚山古墳(全長98.3m)を中心とする塚山古墳群が形成される。これに対応するように、北若松原遺跡や若松原遺跡などの大集落が所在している。また、前期に引き続き、茂原周辺にも殿山遺跡(7)などの大規模な集落が形成されている。

終末期に入ると、東谷・中島地区の中期～後期にかけての中心集落はいずれも衰退し、かわって砂田遺跡(14)や、東の岡本台地上に位置する西赤堀(21)、瑞穂野団地(22)、大岡台(23)などの各遺跡に中心が移っていく。前方後円墳は群集墳の中に造営され、琴塚1号墳(全長52m)を中心とする群集墳(24)、下桑島西原古墳群(25)、上郷瓢箪塚古墳(全長68m)(26)、久部愛宕塚古墳(全長48.8m)(27)、終末期の大円墳下栗大塚古墳(直径43.5m)(28)などが形成される。田川西岸では、殿山遺跡(7)が終末期に衰退し、かわって西下谷田遺跡、薄市遺跡(29)に中心が移る。前者では、板塀に囲まれた区画を持ち、評家とも推定される遺構が確認された。群集墳としては、後志部古墳(全長47.4m)(30)を中心とする神主古墳群などが形成されている。

奈良・平安時代

この時期の集落としては、砂田遺跡(14)、東方の岡本台地上の猿山(31)、瑞穂野団地(22)、大岡台(23)、西刑部西原(15)、西赤堀(21)の各遺跡が、前代に引き続き確認されている。田川西岸では、西下谷田遺跡に代わり、上神主・茂原遺跡(32)が成立する。ここは推定東山道に近接し、河内郡家の政庁や正倉城との想定がなされている。また、この南方に位置する多功遺跡も、瓦を伴う正倉城が発見されており、河内郡家との関係が指摘されている。

中世

磯岡北遺跡(20)や立野遺跡(10)では、当該期の溝や方形堅穴遺構、井戸が確認されている。本遺跡周辺地域は、平安時代末の11世紀末より1597年の豊臣秀吉による改易に至るまでの約500年間、宇都宮氏の支配下にあった。その配下の小領主たちの刑部城(33)、桑島城(34)、高島館(35)、石井城(36)、さるやま城(37)などの小規模な城館群が散在している。これらの分布から、この時期に鬼怒川低地の開発が本格化したことが推定される。

(小野)

第3章 調査方法と成果

3-1 調査の方法

調査区の座標は公共座標（世界測地系）を基準に設定した。総面積は138.59㎡を測る。調査にあたっては、地表から遺構確認面まで1m程と想定されており、重機により表土掘削を行った。表土除去後、遺構確認面までは人力での掘り下げを行った。包含層および遺構内出土遺物については、原則として光波測量機を用いて3次元記録を実施した。また、遺構については、デジタルカメラによる写真測量と手実測作業を併用した。写真撮影にあたっては35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ（500万画素）を併用し、適宜、記録撮影を行った。

3-2 基本土層

調査区の北壁中央と西壁中央の2箇所にあたって基本土層観察のための深掘りを実施し、土層観察作業を行った。基本土層の概要は以下の通りである。古墳時代の遺構はIV層上面で確認された。近世の遺構は、III層上面より掘り込まれていた。

I層 耕作土層

II層 10 Y R 3 / 3 暗褐色土層 ローム粒を少量含む。やや粘性をもち、しまる。

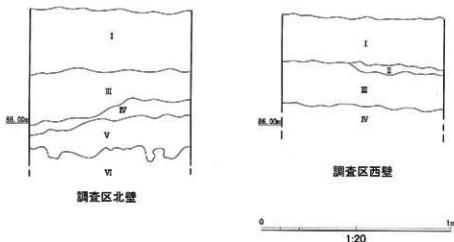
III層 10 Y R 3 / 2 黒褐色土層 ローム粒、焼土粒、焼土ブロックを少量含む。粘性をもち、しまる。

IV層 10 Y R 3 / 2 黒褐色土層 ローム粒を多量に含む。やや粘性をもち、しまる。

V層 10 Y R 4 / 4 褐色土層 軟質ローム層。やや粘性をもち、しまる。

VI層 10 Y R 5 / 6 黄褐色土層 硬質ローム層。やや粘性に欠けるが、堅くしまる。

(小野)



第4図 基本土層



第5図 調査区全体図

3-3 遺構

調査区は、建設予定地の上部構造の都合もあり、南北14.6m、東西7.7mの不整長方形と、その北東隅から東方に伸びた南北2.2m、東西9.7mの長方形の範囲からなり、全体としてはL字状を呈する。総面積は138.59㎡を測る。

検出された遺構の内訳は、竪穴住居1軒、溝3条、土坑2基、小ピット65個などである。古墳時代の遺構は中・近世以降の耕作等により上面を大きく削平されており、遺存状態は不良であった

(1) 竪穴住居跡

1号住居

位置 調査区の北西寄りに位置する。西側に近接して1号土坑が分布する。

形状 全体に攪乱や削平を蒙っており、遺存状態は不良であるが、平面形は長径402cm、短径393cmの隅丸長方形を呈する。カマドは東側に位置し、主軸方向はN-79°-Wを示す。壁は比較的緩やかに掘り込まれており、最大壁高は16cmを測る。入口部は不明である。

覆土 3層に分けられる。第3層が床下内埋土にあたる。

第1層 10YR3 / 2 黒褐色土層 (粘性をもち、しまる。多量のローム粒、少量の焼土粒を含む。)

第2層 10YR4 / 4 褐色土層 (ローム層主体。やや粘性をもち、しまる。微量の焼土粒を含む。)

第3層 10YR4 / 4 褐色土層 (ローム層主体。粘性をもち、しまる。焼土粒・白色粒を含む。)

床面 褐色土を用いて貼り床面が形成されていたと思われるが、全体に攪乱が甚だしく、軟弱であった。周溝は認められなかった。

柱穴 住居址内より合計4個のピットが検出された。平均口径26cm、深さ26cmを測る。このうち、北寄りと南寄りの2つのピットは位置や形状からみて本住居址に伴う柱穴であった可能性も考えられるが、全体の配列は不規則であり、断定はできない。ピット内には、やや粘性としまりをもつ黒褐色土や暗褐色土が堆積していた。

カマド 東壁中央やや南寄りに構築されており、壁外に22cmほど逆U字型に突出する。削平のため、遺存状態は不良であり、焼土や灰白色粘土の分布が確認されたのみである。全体の規模・構造は不明であるが、煙道部を含めた残存部の全長は94cmを測る。覆土は5層に分けられる。

第1層 10YR3 / 1 黒褐色土層 (やや粘性をもち、しまる。焼土粒・焼土ブロック・炭化物・灰白色粘土粒を含む。)

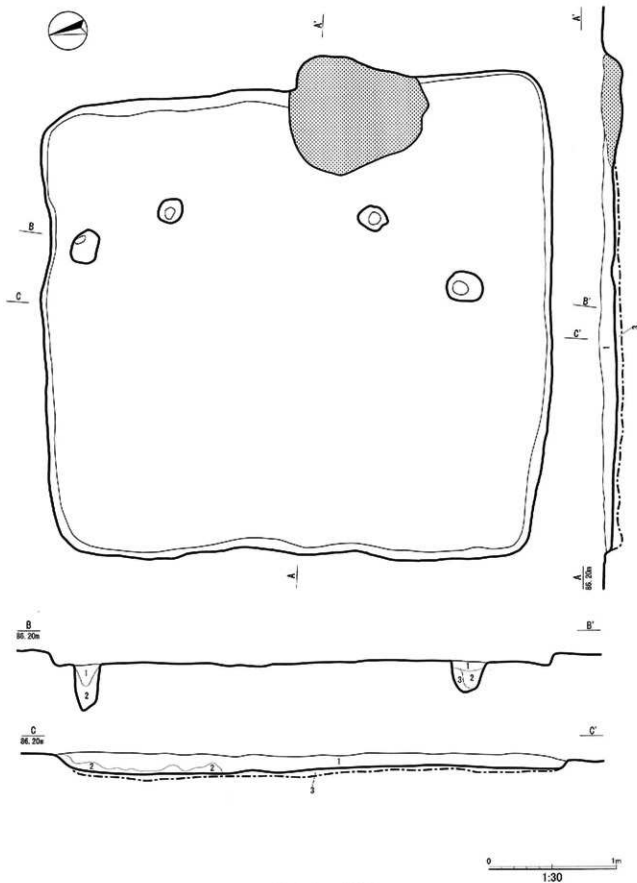
第2層 10YR3 / 3 暗褐色土層 (やや粘性をもち、しまる。ローム粒を含む。)

第3層 10YR4 / 4 褐色土層 (やや粘性としまりに欠ける。多量の被熱ロームブロック・焼土粒を含む。)

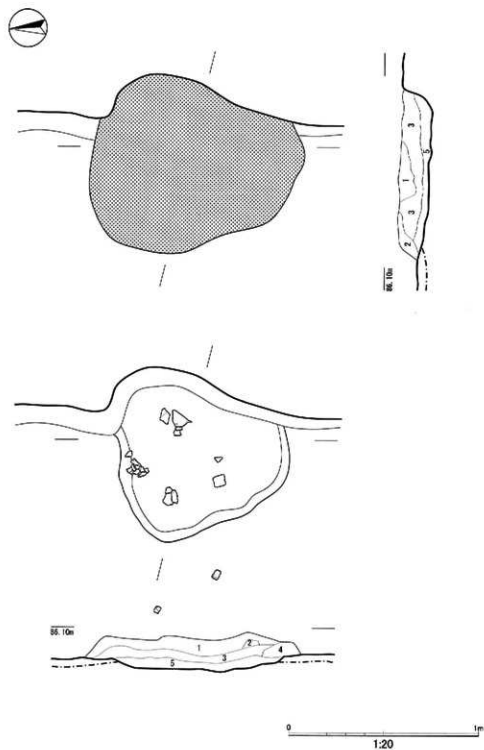
第4層 10YR3 / 3 暗褐色土層 (やや粘性をもち、しまる。多量のローム粒・ロームブロック、焼土粒を含む。)

第5層 10YR4 / 4 褐色土層 (ローム層主体。粘性をもち、しまる。焼土粒・白色粒を含む。)

掘り方 床下全面に及んでいた。床面からの深さ4~8cmを測る。全体的に起伏をもち、断面は皿状に近い。



第6圖 1号住居



第7図 1号住居カマド

出土遺物 土師器 27片、石器 1点が出土した。内訳は、古墳時代末期の長胴甕、坏、磨石などである(第11図1～3・10、図版10)。

時期 伴出土器や住居の形状などから判断して古墳時代末期(6世紀後半～7世紀前半)、鬼高Ⅳ～Ⅴ期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。

(2) 溝

1号溝

位置 調査区の東部をほぼ北から南へ直進している。両端はさらに調査区外へと延びている。途中で東西に走る2号溝を切っている。遺存状態は比較的良好である。

形状 Ⅲ層上面より掘り込まれている。全長は2.4m、上幅150～212cm、底幅26～38cm、Ⅲ層上面からの深さ74cmを測る。断面は緩やかなU字状を呈し、東側中段に幅20～88cmのテラスを有する。底面標高は85.49～85.52mであり、溝底はほぼ平坦である。

覆土 5層に分けられる。

第1層 10YR1.7 / 1 黒色土層 (やや粘性をもち、しまる。微量の焼土粒・ローム粒を含む。)

第2層 10YR1 / 3 黒褐色土層 (やや粘性をもち、しまる。少量のローム粒・白色粒を含む。)

第3層 10YR1 / 3 黒褐色土層 (やや粘性をもち、しまる。少量のローム粒・鹿沼軽石粒を含む。)

第4層 10YR2 / 2 黒褐色土層 (やや粘性をもち、しまる。微量のローム粒を含む。)

第5層 10YR1 / 3 黒褐色土層 (やや粘性をもち、しまる。ローム粒を含む。)

出土遺物 土師器の細片2点が出土している。流れ込みと思われる。

時期 正確な時期は不明であるが、覆土のあり方などから判断して近世以降の所産と考えられる。

2号溝

位置 調査区の北部を北西から南東へほぼ直進している。両端はさらに調査区外へと延びている。西端近くで並走する3号溝を切り、その西側で南北より延びる1号溝に切られる。遺存状態は、比較的良好である。

形状 Ⅳ層上面より掘り込まれている。全長は12.5m、上幅36～114cm、底幅17～52cm、Ⅳ層上面からの深さは73cmを測る。断面は逆台形状を呈し、やや急傾斜で掘り込まれている。底面標高は、85.00m～85.56mであり、溝底はほぼ平坦である。

覆土 7層に分けられる。

第1層 10YR4 / 2 灰黄褐色土層 (やや粘性をもち、しまる。焼土粒・ローム粒・砂粒を含む。)

第2層 10YR1 / 3 黒褐色土層 (やや粘性をもち、しまる。少量のローム粒・砂粒を含む。)

第3層 10YR4 / 2 灰黄褐色土層 (粘性に欠けるが、しまる。少量のローム粒・砂粒を含む。)

第4層 10YR2 / 2 黒褐色土層 (粘性をもち、しまる。少量のロームブロック・砂粒を含む。)

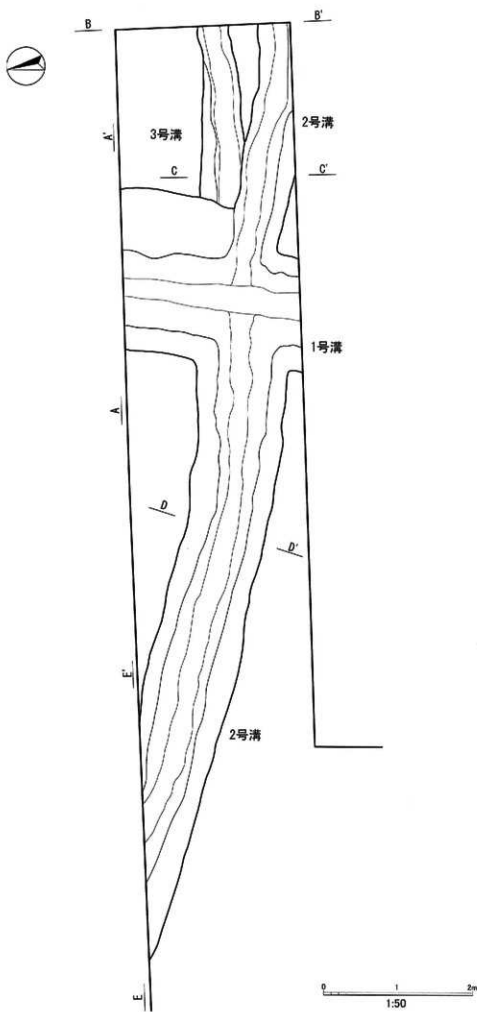
第5層 10YR3 / 2 黒褐色土層 (粘性をもち、しまる。少量のローム粒・砂粒を含む。)

第6層 10YR2 / 2 黒褐色土層 (粘性をもち、しまる。微量のローム粒を含む。)

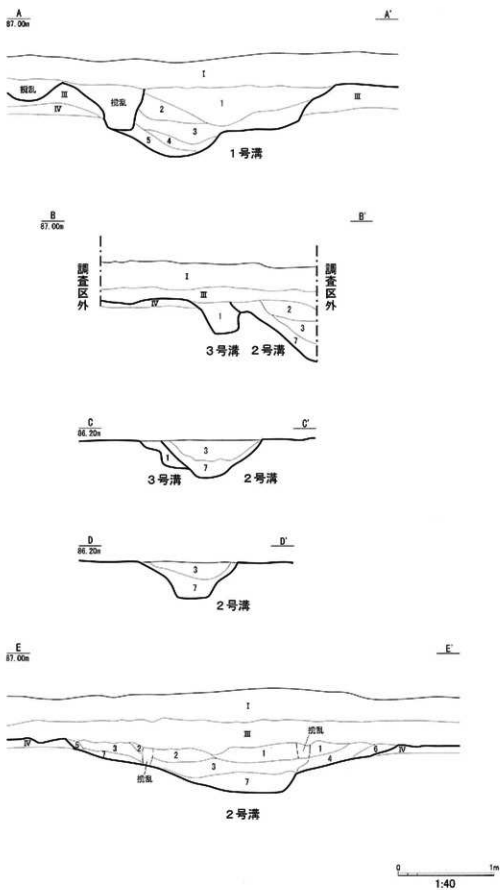
第7層 10YR2 / 2 黒褐色土層 (粘性をもち、しまる。多量のローム粒、少量の砂粒を含む。)

出土遺物 土師器14片が出土した。内訳は、古墳時代末期の長胴甕、坏などである(第11図4、図版10)。

時期 伴出土器などから判断して古墳時代末期(6世紀後半～7世紀前半)、鬼高Ⅳ～Ⅴ期の所産と考えるのが妥当であるように思われる。



第8图 1~3号沟平面图



第9図 1～3号溝断面図

3号溝

位置 調査区の北部を北西から南東へほぼ直進している。両端はさらに調査区外へと延びている。西端近くで並走する2号溝に切れ、その西側で南北より延びる1号溝に切られる。遺存状態は、比較的良好である。

形状 IV層上面より掘り込まれている。全長は2.5m、上幅38～56cm、底幅22～27cm、IV層上面からの深さは37cmを測る。断面は逆台形状を呈し、上面が外側にやや開く。底面標高は85.41m～85.71mであり、溝底はほぼ平坦である。

覆土 単一層である。

第1層 10YR1 / 2 黒色土層 (粘性をもち、しまる。微量のローム粒・ロームブロックを含む。)

出土遺物 みられなかった。

時期 正確な時期は不明であるが、切り合い関係からみて2号溝に後続する古代の所産と考えられる。

(3) 土坑

1号土坑

調査区の北西端に位置する。一部が調査区外にかかるため、全容は不明であるが、平面形は円形ないし楕円形を呈するものと思われる。確認部分の長径は106cm、深さ34cmを測る。断面はフラスコ状を呈し、坑底はほぼ平坦である。土師器3片が出土したが、流れ込みと思われる。II層上面より掘り込まれており、近世以降の所産と考えられる。覆土は2層に分けられる。

第1層 10YR2 / 2 黒褐色土層 (粘性をもち、しまる。微量の焼土粒・ローム粒・ロームブロックを含む。)

第2層 10YR1 / 3 褐色土層 (粘性をもち、しまる。ローム粒・ロームブロックを含む。)

2号土坑

調査区の西端に位置する。一部が調査区外にかかるため、全容は不明であるが、平面形は円形ないし不整形円形を呈するものと思われる。確認部分の長径は78cm、深さ22cmを測る。断面は鍋底状を呈し、坑底は丸みを持つ。遺物の出土はみられなかった。IV層上面より掘り込まれており、古代の所産と考えられる。覆土は3層に分けられる。

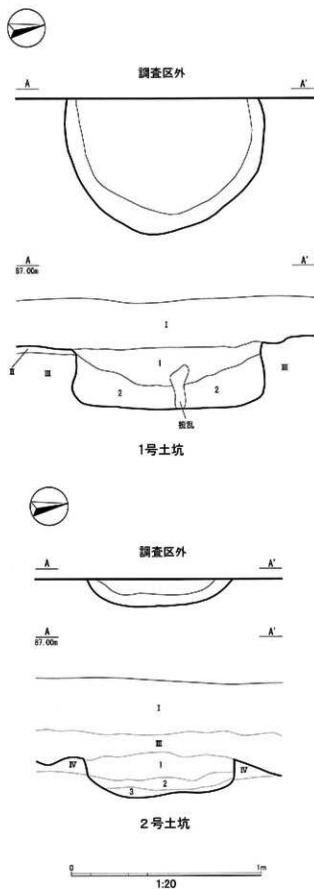
第1層 10YR1 / 3 黒褐色土層 (やや粘性をもち、しまる。微量の焼土粒・ローム粒を含む。)

第2層 10YR1 / 2 黒褐色土層 (粘性をもち、しまる。ローム粒、ロームブロック、鹿沼軽石ブロックを含む。)

第3層 10YR3 / 2 黒褐色土層 (粘性をもち、しまる。多量のローム粒を含む。)

(4) ピット群

合計65個が検出された。調査区の全域にわたって散在しており、規則性は認められない。平均口径34cm、深さ38cmを測る。古代から近世以降のものが含まれていたと思われるが、正確な時期は不明である。



第10图 1·2号土坑

3-4 遺物

今回の調査地点からは土師器52片、土師質土器2片、陶器1片、砥石に転用された瓦片1点、磨石1点、合計57点が出土した。調査面積と比較しても量はきわめて少なく、しかも細片で出土したものが大部分であった。このうち、1号住居に伴うものが土師器27片、磨石1点、1号溝に伴うものが土師器2片、2号溝に伴うものが土師器14片、1号土坑に伴うものが土師器3片、小ピットに伴うものが土師器3片であり、残りは表土および遺構外より出土している。

土師器は坏、甕などが出土している。前述したように、1号住居と2号溝に伴うものが多い。正確な時期の不明な細片がほとんどであるが、時期を確定できたものは古墳時代末期（6世紀後半～7世紀前半）、鬼高IV～V期の所産と考えられるものを中心としている。

土師質土器は唯一の中世の遺物であるが、表土より採集されたものであり、今回、検出された遺構との関係は認められない。

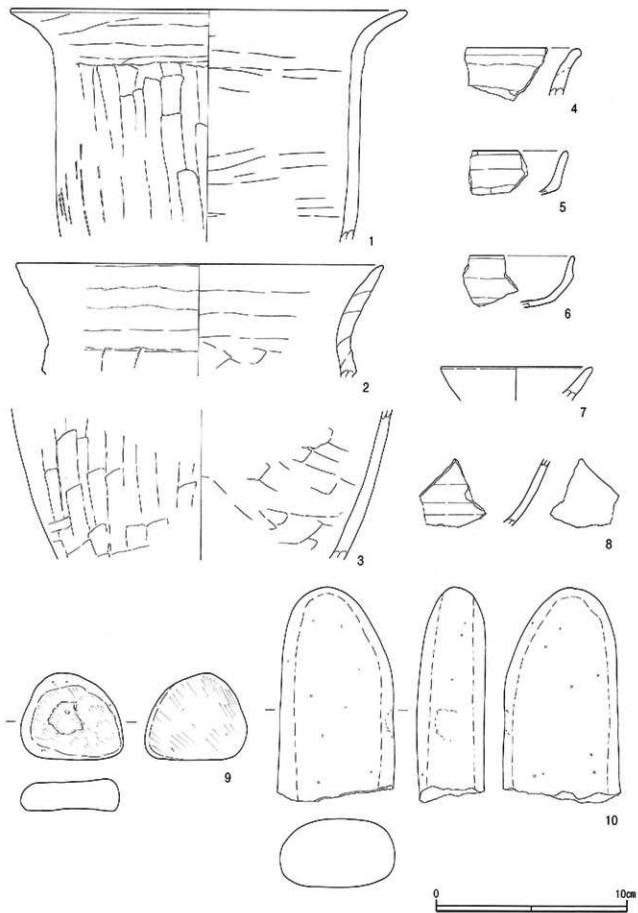
転用砥石は瓦の破片を利用したものであり、全面に磨痕が認められる。近世以降の所産と考えられるが、同じく表面採集されたものであり、今回、確認された遺構との関係は明らかではない。

磨石は1号住居より出土した。全面に磨痕を残している。編物石としての用途も考えられるが、はっきりしない。

(小野)

第2表 出土遺物属性一覧

遺物番号	出土地点説明	器種	種別	残存部位	口径 (cm)	口径 (cm)	器高 (cm)	特徴・手法	胎土	焼成	色調	備考
1	1号住居	甕	土師器	口縁部	(20.4)	—	(12.2)	口縁部外反、口縁部ヨコナデ、胴部タテヘラケズリ、内面ヨコナデ	灰色粒子多量、長石微量	良好	暗褐色	阪? 末高期
2	1号住居	甕	土師器	口縁部	(19.2)	—	(5.9)	口縁部ゆるやかに外反、口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面ヨコナデ、瘤付み痕	白・灰色粒子多量、長石微量	普通	黒褐色	鬼高期
3	1号住居	甕	土師器	胴部	—	—	—	外面タテヘラケズリ、内面ヘラナデ	白・灰色粒子多量、雲母・長石微量	普通	赤褐色	鬼高期
4	2号溝	甕	土師器	口縁部	—	—	—	内外面ヨコナデ	白・灰色粒子微量、長石微量	良好	にぶい褐色	鬼高期 内面にスス
5	31号ピット	坏	土師器	口縁部	—	—	—	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面ヨコナデ	白・黒色粒子微量	普通	明褐色	鬼高期
6	表深	坏	土師器	口縁部	—	—	—	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面ヨコナデ	白・黒色粒子微量	普通	明褐色	鬼高期
7	表深	甕	土師質土器	口縁部	—	—	—	内外面ヨコナデ	黒色粒子微量	普通	明赤褐色	中世
8	包含器	甕	陶器	胴部	—	—	—	ロクロ整形、胎削	—	良好	—	瀬戸・美濃系18世紀
9	表深	転用砥石	瓦	—	—	—	—	両面および側面に磨痕、特に1面に強い床磨痕と敲打痕	—	—	—	近世以降、長さ46cm、幅5.3cm、厚さ1.7cm
10	1号住居	磨石?	石製品	—	—	—	—	全面に磨痕、編物石?	—	—	—	安山岩、長さ113cm、幅63cm、厚さ36cm、重量421.8g



第 11 図 出土遺物

第4章 総括

今回の調査では、古墳時代末期の竪穴住居1軒、溝2条、土坑1基、近世以降の溝1条、土坑1基、時期不明のピット多数が検出された。

砂田越沼遺跡では、本調査地点西側の1区、北側の2区、A区、南側の3区と、これまでに4次にわたる発掘調査が行われており、古墳時代前期～平安時代に至る竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑、ピット多数が確認されている。また、2・3区の西側では、幅6～7m、深さ1～1.2mの河川状の遺構が発見され、ここに降りる階段状の遺構も検出されている（(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター2006）。

今回検出された1号溝（近世以降）は、調査区外の北方において、A区で確認された南北方向に延びる溝と、南方において3区で確認された南北方向の溝とそれぞれ接続する、同一の溝の可能性が考えられる。その一方、北方に位置する2区では本溝の延長部分は検出されておらず、西方に位置する1区でも同様に確認できないことから、1号溝は、本調査区外の北方ですぐに東側に曲がっている可能性も考えられる。

同様に、2号溝（古墳時代末期）は、調査区外の西方において、1区中央で確認された東西に延びる溝と接続する可能性が想定されるが、正式の報告書は未完であるため、各遺構の相互関係についての詳細な検討は、それらに譲りたい。

今回の調査では、竪穴住居は古墳時代末期に属する1号住居の1軒が検出されたのみであるが、3次にわたる周辺域の調査では、古墳時代後期～終末期の竪穴住居が複数軒検出されており、やや散漫ではあるが、この一帯に当該期の集落が形成されていたことがうかがわれる。しかし、本遺跡が位置する東谷・中島地区における古墳時代中期～後期以来の中心的な集落群は、この時期になると衰退し、かわって本遺跡の北西600mに位置する砂田遺跡や、東の岡本台地上に位置する瑞穂野団地、大岡台、西赤堀などで集落の分布が増加する傾向が認められる（内山2006）。

以上をまとめるならば、古墳時代末期には本遺跡は集落として利用されており、住居や溝が構築された。その後、わずかな遺物の出土を除けば、長期にわたって土地利用の痕跡は見出されないが、近世以降になると、再び溝や土坑が形成され、おそらく耕地として利用された、という大まかな変遷図式を想定することが可能であろう。

(小野)

参考文献

- | | | |
|-----------------------------|------|---|
| 宇都宮市教育委員会 | 2007 | 『辻ノ内遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書 第61集 |
| 宇都宮市史編纂委員会 | 1979 | 『宇都宮市史 原始・古代編』宇都宮市 |
| 宇都宮大学考古学研究会 | 2003 | 『塚山西古墳・塚山南古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第48集
宇都宮市教育委員会文化課 |
| 内山敏行 | 2005 | 『東谷・中島地区遺跡群5 立野遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第29
0集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団 |
| 内山敏行 | 2006 | 『東谷・中島地区遺跡群7 磯岡北古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告
第299集 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団 |
| 上三川町史編纂委員会 | 1979 | 『上三川町史 資料編 原始・古代・中世』上三川町 |
| 栗田欣行 | 2005 | 『磯岡遺跡 第二次調査報告』上三川町埋蔵文化財調査報告 第32集
上三川町教育委員会 |
| 下野地学会 | 1979 | 『栃木の地質をめぐって』築地書館 |
| 栃木県史編纂委員会 | 1981 | 『栃木県史 通史編1 原始・古代一』栃木県 |
| (財)とちぎ生涯学習文化財団
埋蔵文化財センター | 2006 | 『(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター年報
第16号(平成18年度版)』 |
| 深谷昇・高野浩之・戸部孝一 | 2004 | 『磯岡遺跡』上三川町埋蔵文化財調査報告 第29集 都市基盤整備公
団・上三川町教育委員会・山武考古学研究所 |



調査区全景 (南東より)



調査区全景 (南より)

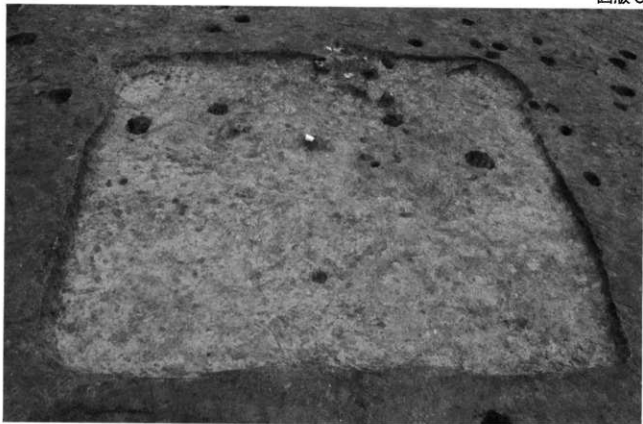
図版 2



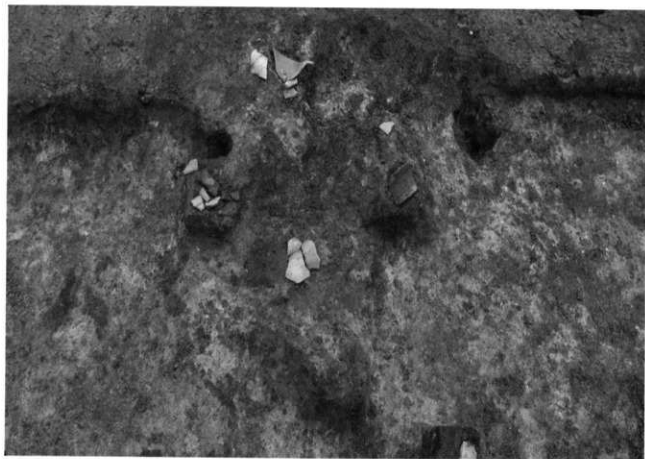
調査区全景 (南東より)



調査区全景 (東より)



1号住居全景 (西より)



1号住居カマド (西より)

図版 4



1号住居掘り方 (西より)



1号住居作業風景 (東より)



1～3号溝全景（東より）



1号溝全景（南より）

図版6



2号溝全景（西より）



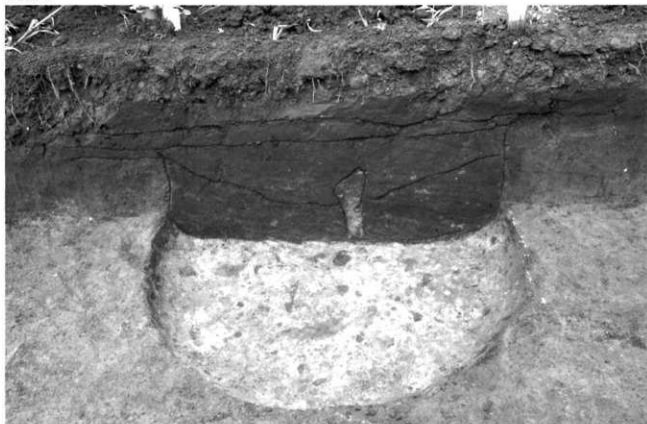
2号溝土層断面（西より）



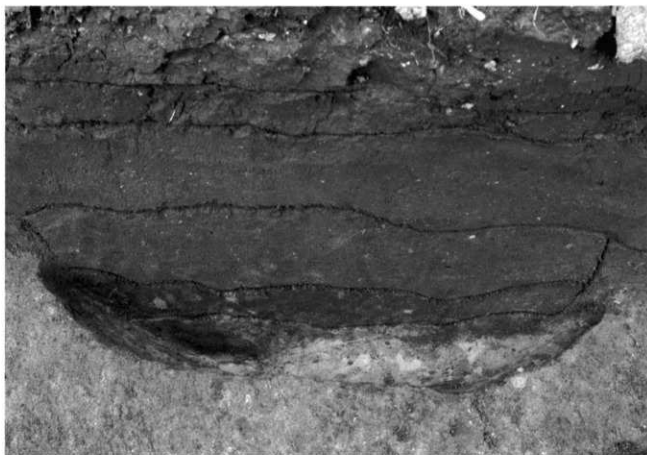
3号溝全景 (西より)



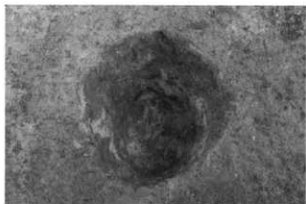
2・3号溝土層断面 (西より)



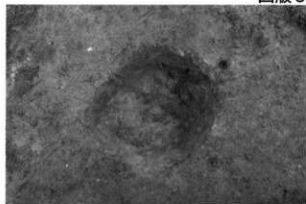
1号土坑全景 (東より)



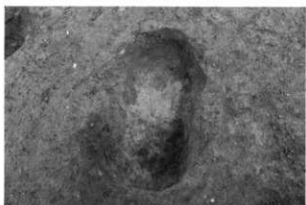
2号土坑全景 (東より)



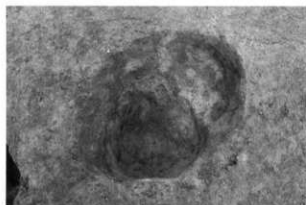
16号ビット (南より)



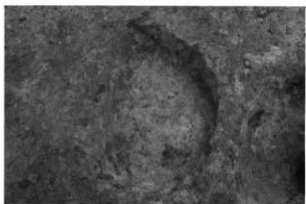
24号ビット (南より)



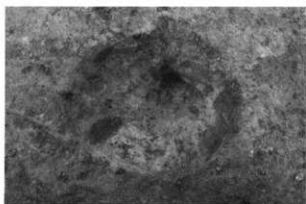
31号ビット (南より)



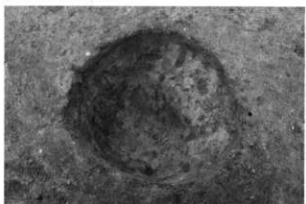
35号ビット (南より)



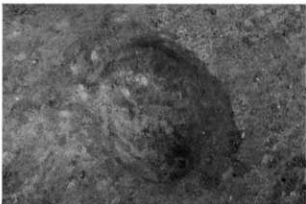
43号ビット (南より)



53号ビット (南より)



61号ビット (南より)



64号ビット (南より)



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

報告書抄録

ふりがな	すなたうぼぬまいせき							
書名	砂田姥沼遺跡							
蔵書名								
巻次	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第64集							
編者名	小野麻人							
著者名	小野麻人・大橋 生							
編集機関	独立東京産業研究所 所在地 〒350-0855 埼玉県川越市伊佐沼28-1 TEL.049-229-5771							
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5 TEL.028-632-2766							
発行年月日	平成19年12月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ・・・ 36° 29' 38"	東経 ・・・ 139° 54' 50"	調査期間 ・・・ 2007.2.17 ～ 2007.2.26	調査面積 ・・・ 130.00㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
砂田姥沼遺跡	宇都宮市砂田町 字姥沼 東谷中島地区 51街区3画地	00201	406					工場建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
砂田姥沼遺跡	集落跡	古墳時代	墓穴住居跡1軒、第2条 土坑1基、ピット群		土師器、石製品		古墳時代末期の 集落跡の一部	
		中～近世 以降	第1条、土坑1基、ピット群		陶器、土師質土器、磁石			

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第64集

砂田姥沼遺跡B区

工事建設に伴う発掘調査報告書

平成19年12月発行

編集 株式会社東京産業研究所

〒350-0855 埼玉県川越市伊佐沼28-1

TEL.049-229-5771

発行 宇都宮市教育委員会

〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5

TEL.028-632-2766

印刷 関東図書株式会社

〒336-0021 埼玉県さいたま市南区別所3-1-10

TEL.048-862-2901